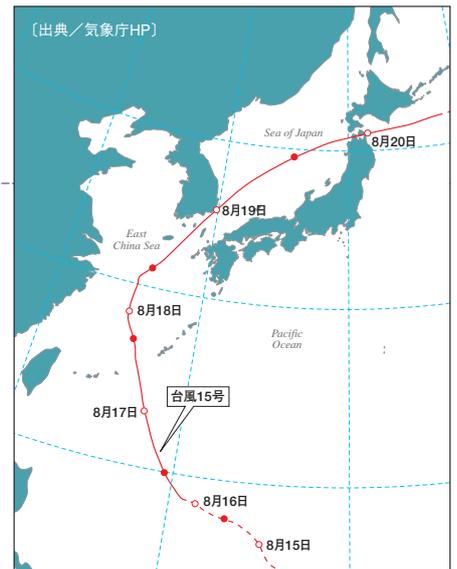


台風15号

災害発生日 ●平成16年8月17日～20日
 主な被災地 ●四国地方

小雨の瀬戸内海地方を襲った 局地的集中豪雨のツメ跡

フィリピン東方で発生した台風15号は韓国南部と九州北部の間を通過中に前線の活動を刺激、8月16日から四国地方へ600mmを超える雨量をもたらした。通常は雨量の少ない四国瀬戸内海側でも大雨の被害を受けた。人的被害は死者10人、負傷者28人。住家被害は全壊16棟、半壊88棟、一部破損663棟。



愛媛県内で土砂災害続出 JR予讃線が1週間不通

台風15号は日本列島へ上陸した台風としては5個目に当たる。8月までに5回の上陸は1962年以来42年ぶりで、2004年の台風上陸回数がいかに多かったかをもの語っている。

台風15号は、瀬戸内地域へ甚大な被害をもたらした。愛媛、香川両県は瀬戸内海に面し、もともと雨量の少ない地域だが、台風15号の影響で湿った空気が入り前線の活動が活発化。四国や兵庫県南部などで局地的に強い雨が降り、16日夜の降り始めから四国で600ミリを超える雨量を記録した。

愛媛県内では、新居浜市を中心に土砂災

害が続出。愛媛県内では土石流が23件、がけ崩れが23件発生。愛媛県はこの後台風21号、23号等により土砂災害が発生し、2004年度には土砂災害発生件数が232件と全国2



▲対岸で発生した土石流の直撃を受けた落合自治会館〔写真提供／読売新聞社〕



▲愛媛県新居浜市神郷の土砂災害現場〔写真提供/四国地方整備局〕

位となった。

台風15号では特に東予東部で集中豪雨の被害が多く、新居浜市東部では、2時間に109mmという猛烈な局地的豪雨を記録。1000棟余りが浸水するだけでなく、市内各所で土砂崩れが発生、民家34棟が全半壊する被害があり、死者4人の犠牲者を出した。

多喜浜地区の土石流被害は特に大きく、JR予讃線が同地区で約1週間にわたって不通になるほどの被害を受けた。

香川県でため池堤防決壊 土石流で人的被害

一方、愛媛県と同じ瀬戸内気候の香川県でも西讃地域を中心に局地的集中豪雨に見舞われ、床上・床下浸水580棟、法面崩落5箇所、ため池堤防決壊などの被害が相次いだ。

前田川上流域では、局地的な豪雨により同時多発的な土砂崩れが発生。大野原町五郷の自治会館対岸で発生した土石流は同会館を襲い、同会館に自主避難していた2世帯4人のうち、2人の命を奪う惨事をもたらした。

また、愛媛県との県境域に位置する高知県大川村では、土砂崩壊により道路が寸断され、孤立化した。

住宅地区だけでなく、両県の農林業施設も被害を受けた。愛媛県では、新居浜市内のため池2箇所が損壊が発生。中でも郷地区にあるため池、臼切火池では堰堤の一部30mが崩壊し始め、決壊の恐れがあったため自衛隊が出動。自衛隊員49人と地元消防団による300人体制で、警戒と復旧作業にあたった。このほか四国中央市でも、牛舎損壊3箇所、山腹崩壊4箇所の被害が発生している。

香川県でも被害が続出した。観音寺市栗井では、鶏舎2棟が倒壊。採卵鶏1万2000羽が土砂に埋まり圧死する被害が出た。農作物では、豊浜町の梨園や大野原町のミカン園やネギ畑に甚大な被害が出た。また、観音寺市など1市5町でため池決壊などが発生、農業施設が被害を受けた。

【インタビュー】

INTERVIEW



愛媛県新居浜市 立川自治会長
近藤千年氏

日頃の防災意識が地域を救う ～過去の教訓を活かした防災対策～

今から約30年前、1976年の台風17号による土砂災害の教訓から、連続雨量や時間雨量に基づいた警戒策や連絡体制マニュアルを整備。地域ぐるみの防災対策が万全で、過去30年間ひとりの犠牲者も出さなかった新居浜市立川自治会長の近藤千年^{ちとし}氏に地域防災の心得を伺った。

●新居浜で土砂崩れが相次ぐ中、地域の協力で被害者ゼロにできた理由をお聞かせ下さい。

1976年の台風で2年間以上の避難生活をした経験と教訓を生かし、自治会で連絡体制と災害に対する警戒策をマニュアル化しました。これをもとに長年、訓練を続けたことが活かされ、早目（台風15号の時は新居浜市が避難勧告を出す30分前）に避難を呼びかけることで被害者を出さなくてすんだといえるでしょう。平成16年には5回の避難を行いました。日頃から、速やかに、安全に避難することをテーマとし、住民の災害避難時の意識をアンケート調査するなどしていたため、皆さんに災害時の対応意識を啓蒙できたことも理由でしょう。

●アンケート集計の結果、改善されたことはあるのでしょうか？

「市の広報塔で放送しても聞こえない」

というアンケートの集計結果があったので、避難時の放送文を変更しました。避難基準を設けて、放送文の内容を三段階に分けて放送するようにしました。危険性が高くなる第二段階からは、住民の方々の注意を引くように20秒間サイレンを流すなどの工夫もしています。

●高齢者が多い地域とお聞きしましたが、具体的な避難方法をお聞かせ下さい。

立川自治会には98世帯約200人の方がお住まいですが、そのうち70歳以上の方が100人を超えています。立川自治会では民生委員の方が高齢者宅の状況を把握しており、各家庭を車でチェックして回るとか、避難基準の初期段階で親族に連絡をして迎えに来てもらい避難するなどの方策をとっています。避難場所は最初、公民館だけでしたが、生理面の問題やストレスで体調を崩す方が出るなどしましたので、新居浜市にお願い

してマイントピア別子という温泉施設を避難場所に指定してもらいました。おかげで、お年寄りに好評を得ています。

●地域の防災活動を長く続けていく秘訣は何ですか？

災害の怖さや、その時に得た教訓などを自分たちだけでなく、今の若い世代にもつなげていくことが継続していくためのポイントだと思います。

●行政と地域の役割について、どのようにお考えですか？

行政ができることには限界があります。立川自治会では、雨が強くなると地域の見回りをしています。川の水の色の変化などの前兆現象は、地元が一番早く見つけることができます。行政と地元の両方が、お互いの役割を理解しておくことが大事だと思います。